

---

# ゴシップ・ダンス！

空道

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「ゴシップ・ダンス！」

### 【Zコード】

Z4342A

### 【作者名】

空道

### 【あらすじ】

派遣会社ランクレイド。落ちこぼれ社員であるライアはある日片田舎へ派遣される。派遣内容は不明。これは派遣？それとも左遷？しかしライアに悩んでいる暇などなかった！

## 第一話・派遣か左遷か（前書き）

初投稿です。感想を頂けたらうれしいです。

## 第一話・派遣か左遷か

ガタンゴトン

軽快な音と共に列車が走る

窓から見える景色は一面緑の草原。旅をするにはもってこいだ

「…はあ…。」

車内から景色を見ていた女は盛大な溜め息をついた  
肩まである、夕日色をした髪はバサバサと風にあおられっぱなし  
が本人は気にしていないというよりも気付いていないようだ

彼女の名はライア・トッヅ・ド・ウイル

派遣会社として名高いランクレイド社の社員である

彼女が仕事もせずにして居るとの発端は3日前に遡る…

「出でいけ。」

「…は？」

上司の言葉にライアは思わず聞き返した

「出でいけ。」

「…いや、あの、部長それってどうい…。」

まさかリストラ！？

一瞬最悪な事態が頭をよぎる

「派遣要請だ。」

「な、なんだ…。リストラかと思つた。」

「できれば私もそうしたい。」

安堵するライアに上司である男 タージス・ノイスは冷たく言い  
はなつた

## ランクレイド社派遣局特務部

特務と言つたら聞こえはいいが実際は密猟者の確保から近所のいざこざの仲裁、子守りの仕事、とピンからキリまである雑用のような部だ

曰く寄せ集め

曰く駄目人間密集地帯

社内ではそう呼ばれ、あそこに落とされたら最期だ！と恐れられて  
いる

そんな部の部長であるはタージスは頭脳明晰、容姿淡麗な完璧人間  
であり

「どこをどう間違えてこんな部に…？」

と言われていた

「それで部長、どこへ何をしにいけばいいんですか？出来ればこな  
いだのジャフリーさん宅の犬の散歩はやめてほしいんですけど」  
上司のリストラ希望発言はキッパリ無視して訪ねる  
「派遣場所は西サンクト区域第13番詰め所だ。派遣内容はそこ  
の地域社員に聞くように。」

「分かりました西サンクト区域ですね…って西サンクト区域…？」

思わず大声で叫び上司に睨まる

「部長、西サンクト区域って未発展区域の…？」

ランクレイド社がある中央都市はかなりの機械が発達している  
この大陸では中央から離れるほど技術が落ちていくのだが、西サン  
クトは大陸のはじつ

つまりはド田舎だ

「何か問題があるか？トッドウィル派遣社員。」

「も、問題つて、だつて、あう…。」

上司に一回りと微笑まれ（ライアには悪魔の微笑みに見えたが）たじろぐ

「わ、私何か悪いことしましたか…？」

「器物損傷、暴力沙汰、おまけに依頼人負傷。その他を挙げればきりがないが。なにか文句でも？」

「うう…ありません。」

問題社員が氷の鬼と有名な部長に敵うわけがなかつた

かくしてライアの西サンクト派遣は決行されることとなつた

「人生つてなんだらう…？」

サンクト区域直行の汽車にゆられながらわけの分からぬことをつぶやいてみる

## 第一話・落入り魔とエリート

ぐう

盛大な音がなる

時計を見るところそろ正午だ

「…」飯食べよ。」

通りかかった車内販売でサーモンベーグルとコーヒーを頼りと皿を  
つぶつてぱんぱん、と手を叩き祈る

どうか派遣先にお風呂がありますように…！

「さて、いただきまーす…つてええええー！？」

食前の祈りをし、いざ食そうと手を伸ばすが  
「ないつ私のベーグルがない…」

先ほどまでたしかに存在していたサーモンベーグルが跡形もなく消  
えていた

と、慌てふためくライアの頭上から男の声が聞こえた

「うん。車内販売にしては結構いけるな。」

「…？」

驚き顔をあげるとそこににはぱくぱくとベーグルを食べ続ける男がいた  
歳の頃は20代前半、灰色の髪をしたなかなか端正な顔の男だ  
そしてライアはその男を知っていた

「キース！何でここに！？てか私のベーグル！」

「ん？ああ、うまかつたよ。」駆走さん。

「ああ…」はんが…。

ガクリ、と膝をつくライアを無視してキースはざっと座席に座つた  
ついでにコーヒーに手を伸ばす

「いやあ、実は俺も西サンクト区域に同行することになつて。」

「はあ？あんた執行部でしょ？エリートがなんで田舎なんかに…  
はつ、まさか左遷！？」

「期待を裏切つて悪いが違う、左遷はお前だろ。俺はタージスさん

に頼まれたんだよ。お前がこれ以上厄介」とをおこさないよう見張ってくれつて。直々に頼まれちゃあ断る訳にもいかないからな。」

「なんだあ…、といつぱりこれって左遷なのかなあ…。」机の上に突つ伏してつぶやくライアを横田で見つつきースは香氣に景色を楽しんでいた

「…しかし、今回の派遣はおかしなところがあるな。」その言葉に人生の不毛さについてつぶつと語っていたライアは顔を上げた

「うん…。それは私も思つてた。派遣内容は現地でつていつのと、私にあんたみたいな…つまり…その。」

「監視とはいえこのいそがしいときに俺みたいなエリートを落ちこぼれのお前につけること。」

「落ちこぼれで悪かつたわね。」

顔をしかめるライアにキースは笑いかける

「ま、なんにせよ着けば分かるさ。それまでは昼寝でもして……っ！」

「あやあ…？」

ガシャン…ギィィィイ…！

轟音とともに列車が大きく傾き、急停車するブレー キ音が響く！

「うきょあああ…」

「バカヤローー口開くな、舌噛むぞー！」

「あう…、もう遅いわよ…。」

思つきし嘔んだらしく涙目になりながらも状況を確認する

「なに？ 脱線事故？」

「いや、どうだう…取り合えず怪我人の確認だ。」

「了解。」

二人は横倒しになつてゐるらしい列車のドアから苦労して通路に出る

どうやら元々乗車人数が少ないらしい

見たところ大怪我をしてゐる人はいないようだ

「怪我人はいないようだな。」よし、俺は後ろの貨物室を見てくる

からお前は先頭の車掌室を見に行つてくれ。」

「分かった。あとで合流しましょ。」

「ああ。気を付けるよ。」

## 第三話・ついてない日

「『仮を付ける、なんてキースも心配症ね。』

車掌室へ続く通路を歩きながらライアはぶつぶつと呟いていた  
左遷……いやいや、派遣中に事故なんて本当にについてない  
踏んだり蹴つたりとはこのことだ

そんなことを考えてこなみで無事に（2、3回転んだが）車掌室  
についた

「よおっし、こんなこと終らせて西サンクトに行って名物料理でも  
食べよっとー。」

なんとか思考を前向かにしてから車掌室のドアを開ける

「あのぉ、すみません……。  
「動くな。」

低い声とともにこめかみに固いものが押し当たられる  
本能的に腰にある銃へと延びていた手は押しどじめられた

「おかしな真似をすると、殺す。」

冷めた男の声　本気だろ？

うかつに動いてはいけない。後ろにいるのは列車を襲った犯人だろ  
うから

ゆつくつと、両手をあげる

「質問に答える…ランクレイド社の派遣員とは、お前か？」

「…それが何に関係あるの？それとも他に列車を襲った理由が…」

「質問に答えると言つたはずだ！」

「めかみに当てられた 恐らく銃だろ？ がむちに強く押し付けられる

冷や汗が流れるのを感じながら慎重に答える

「…そりよ、それが、どうしたの。」

にやり、と背後で笑う気配

「確かめたかったのさ、確実に仕留めるためにな！」

引きがねが引かれる！

それと同時にライアはしゃがみこんで体勢を低くすると共に思い切り駆け出した！

背後から犯人の罵声が浴びせられるが撃つてへる気配はない  
振り返らずに車掌室の中へ駆け込む

「…なんで私ばっかりこんな目にあつのよー。」

泣きたくなるのを堪え、銃を構える

それに気付き、犯人も客席の陰に身を潜めた

犯人は私が背を向けたにも関わらず撃つてくることは無かつた

ということは命中率が低いのか、極めて殺傷力が低いのか　恐らく後者だろう

どちらにせよ、犯人は近くに寄らなければ私を殺せないとゆうことだ

「逃げ場の無い所に行くなんてバカだな。」

やかましい！

心の中で叫ぶと同時に銃を撃つた

当然、犯人に当たる筈もない

構わずに撃ち続ける私に犯人がバカにした、少々呆れた声で言つ

「おいおい、頭大丈夫かよ？当たるわけねえだろ。…お前落ちこぼれか？」

「あんたなんかに言われたくないわよ…」

さらに銃を撃ちもつとするが響いたのはカチリ、という不吉な音のみ

「弾切れか？それとも演技か？まあ、どちらでもいい。どうせお前はそこで当たらぬ銃を撃つていればいい。」

「その通り。」

背後から聞こえた声に犯人は振り返ることはできない  
己につき付けられた銃の存在に気付いたから

「当たらなくとも、銃声を聞いたヒーローがどんでくるからな。  
「だれがヒーロー？」

ほっとしたのを隠すように言うが安堵が混じっているのは仕方がない

「さて、銃を捨てておとなしく投降して貰おうか。」

「…くそつーもつー一人いるなんて聞いてない…！」

聞いてない？

「おい、それはどうこいつ…」

いぶかしげにキースが問おうとした時、犯人に異変が起つた

小さくうめいたかとおもひと自分の喉を搔きむしり、苦しみだす！

「あああッ！ぐうあ…！」

「おい！？どうした…！」

「ちょつ…キース！？どうなつてんの！？」

「俺が知るか！」

戸惑う二人の前で犯人に更なる変化があらわれる

それは恐ろしく、おぞましい光景だった

犯人の、その搔きむしる喉、顔、手…全身から水分が奪われたよう  
に萎み、年老いたようになり、ついにはミイラのように骨と皮のみ  
になってしまった

事切れた体が床に倒れるがその音はまるでスカスカの枯れ木が倒れ  
るような軽い音だった

「これは…。」

「な、に…？」

つこうつきまで人だったものに田を向け言葉もなく立ちすくむ

あまりのことにただ呆然とするしかなかつた

「本当にどうなつてんのよ...。」

「...俺が知るか...。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4342a/>

---

ゴシップ・ダンス！

2010年10月17日15時10分発行